



salut

さ り ゆ

VOL.57

ちがいを 見るのは、
人びとの 偏見である。
(「仏教聖典」より)



【サリュ】…フランス語で「救い」の意

○應典院寺町倶楽部主催事業○

アサヒ・アート・フェスティバル 2008参加事業 「The アートフォークロアリズム in 上町台地」

この夏、上町台地にて、生活の中や、まちの中からアートを再発見するプロジェクト「The アートフォークロアリズム in 上町台地」を行います。アートが紡ぐまちの記憶と人々のいとなみを、写真展から音楽ライブ、まち歩きから落語まで、多様な表現で立ち上げらせてゆきます。 会期：2008年8月24日(日)～9月7日(日) 協力：上町台地からまちを考える会、谷町空庭

NOET 写真展「丘」



NOET(写真家)が撮影した歴史の丘、上町台地の写真展です。

📅 8月24日(日)～9月7日(日) 12:00～19:00 入場無料

[]=_(ウチミ・チソ)

上町台地に位置する、屋内空間「谷町空庭」と屋外空間「難波宮跡地」での眼と自作音具によるサウンドパフォーマンス。それら二空間の移動プロセスも含めて、日常の中に溶け込む風景や音に対する感覚を研ぎすます、きっかけ作りを行います。

1部：谷町空庭(大阪市中央区常盤町1-1-8-6F)
2部：難波宮跡地(大阪市中央区法門坂1)
参加アーティスト:mamoru(サウンドアーティスト)/大和川レコード(日常編集家/アーティスト)
📅 8月30日(土) 17:00～19:45
1部 谷町空庭屋内ライブ 17:00～18:30(完全予約制、定員25名) 移動 18:40～19:00
2部 難波宮跡地屋外ライブ 19:00～19:45(雨天決行、要雨具、) ¥2000(1ドリンク、つまみ付き) 難波宮ライブのみ参加カンパ制。

※このプログラムは大阪市の現代芸術創造事業の一環で企画されており、主催：大阪市 企画運営：財団法人大阪城ホール、應典院寺町倶楽部

落語で伝承！上町台地アートツーリズム【寺町編】

上方落語の代表作「天王寺参り」をテーマに、上町台地の魅力的なスポット、四天王寺界隈を巡るまち歩きツアーを開催します。まち歩き終了後には、噺家 桂都んぼさんによる実演をじっくり堪能できます。

1部 四天王寺界隈まち歩き 10:00～11:30
まち歩き案内人：オダギリサトシ
※完全予約制(定員20名)です。
※雨天決行いたします。雨具をご用意ください。
2部 落語「天王寺参り」 13:30～14:15
落語家：桂都んぼ

📅 9月7日(日) 10:00～14:15
1部集合場所：JR天王寺駅中央改札前
2部：應典院

1部2部 両参加 / ¥1500
1部 or 2部 のみ参加 / ¥1000
終了後、全参加アーティストによるトークサロンを開催。

○應典院寺町倶楽部主催事業○

第80回いのちと出会う会「天から授かったダウン症の遥香」

長女として授かった遥香ちゃんがダウン症だとわかった時には悲しみに涙が止まらなかった。遥香ちゃんはそののち元気でたくましく育ち、今はすばらしい子どもを授かったと感謝されています。また中村さんと本人は5年前に舌癌を告知され手術を受けられました。

話題提供者：中村信彦さん(茨木市議会議員 社会福祉法人とよかわ福祉会 専務理事)

📅 9月18日(木) 18:30～20:30 一般¥1,000 寺町倶楽部会員・学生¥700(お茶菓子付き)

第81回いのちと出会う会「『笑み道』輝いて生きるには！」

脳出血で生死をさまよう体験から奇跡的に回復し、そののち体験したパニック症にも命がけで自己改革していく中、原因はすべて自分の中にある事に気づき、全身で体感するプログラムを開発。「笑み道」で心も身体もきれいになって輝いて生かされるお手伝いをされています。

話題提供者：康 有羅さん(日本表現協会代表)

📅 10月16日(木) 18:30～20:30 一般¥1,000 寺町倶楽部会員・学生¥700(お茶菓子付き)

○應典院演劇情報○

space drama 2008参加公演

ミジンコターボ 「スーパーソニックジェットガール」



セミはね、そんなに長くは飛べないんだって。だから木からすぐ隣の木に飛び移ったりして鳴いているの。木の少ない都会のセミはどうしてるんだらうと思って地面を見たら、アスファルトで干からびてた。

でね、結局なにが言いたいのかって言うと、愛だの夢だのっていう類は、全部まとめてファックだって事。

📅 9月9日(火) 19:30
9月10日(水) 19:30
9月11日(木) 17:30 ミニライブあり

前売り・当日共 / ¥2,300

オリゴ党 「カーゴ・カルト」



📅 9月13日(土) 15:30 / 19:30
9月14日(日) 13:00 / 17:00
前売り / ¥2,300 当日 / ¥2,500
学生 / ¥1,500(当日のみ、要学生証)
問い合わせ / 06-6320-1442(劇団)

TEAM晩年の少年 「gold/bug！」



📅 10月25日(土) 19:00
10月26日(日) 12:00 / 17:00
前売り / ¥1,800 当日 / ¥2,000

問い合わせ / 090-9161-0854(田和)

○大阪市現代芸術創造事業○

ARCトークコンピレーション#018 「京都発！市民メディアと持続可能な地域デザイン」

京都拠点に、市民が情報を発信するラジオカフェの運営から、イベントで利用するリユース食器、フェアトレード、イベントサポートまで幅広く活動する太田航平さん。市民が作り出す持続可能な地域づくりについて、様々な方面から考えていきます。

ゲスト：太田航平
(市民メディア全国交流集会'08京都実行委員会事務局長/京都ラジオカフェ株式会社専務取締役/
NPO地域環境デザイン研究所ecotone代表理事)

📅 9月27日(土) 18:00～20:00 ¥1,000(お茶、資料代)
会場 / 築港ARC

大阪のアートを知り尽くすの会 vol.6 散策ガイドマップ「ミニシアター」編

かつて、文化の中心だったまちと表現される大阪。とはいえ今でも文楽や近代建築などの伝統文化が盛んで、じっくりとものづくりができるまちであり、また同時に前衛的なアートシーンや小演劇界でのその存在感もやはり濃厚ではないでしょうか。この会では参加者皆で、築港ARCのライブラリー資料や雑誌「大阪人」を活用して、大阪の小劇場マップ、大大阪モダニズム建築マップ、音楽口クシーンマップなどなど、様々なテーマで作り上げ、文化芸術のまちとして、大阪には何が、何があったのか、今一度見つめなおしてみます。

📅 9月6日(土) 18:00～20:00 ¥500(お茶、資料代)
会場 / 築港ARC

應典院寺町倶楽部 TEL:06-6771-7641 FAX:06-6770-3147 info@outenin.com http://www.outenin.com

築港ARC(ちっこうアーク) TEL&FAX:06-4308-5517 arc@outenin.com http://www.webarc.jp

アトセツ

夏の應典院は演劇一色になる。まずは、恒例の舞台芸術祭 space x terna。その後、蝉雨のなか、大阪高校演劇祭 Highschool Play Festival (H.A.U.) J1p高校生たちの声が響き渡る。ゆえに、この時期の應典院を演劇の甲子園と呼ぶ人がいる。そんな夏、先般、寺子屋トークにメインゲストとしてお招きした加藤種男さんの遺稿の祝宴にお誘いを受けた。お盆前の東京とお盆明けの大阪のうち、大阪のみ参加させていただいた。ビール瓶を手にした乾杯の踊り、金粉ダンサーの祝いの踊り、全員での替え歌の合唱などの演出に、ご本人も、関西らしいと笑みをこぼされていた。会の終わりを加藤さんによるお礼のことはが印象的だった。播磨のご出身ゆえに、関西は故郷と切り出し、東京での大学生活、町工場での仕事を経て、40歳を過ぎてからアサヒビルに入社したことなど、そして、節目節目を通して、多彩な仕事みをつくり、ネットワークが広がった、と、人生が語られたことをライフ・ストーリーという英単語は his story に分解できるから、歴史とは彼の (his) 物語 (story) として第三者に語られてこそ成立する、という話を聞いた。例えば、このアトセツも含めて、加藤さんが人生を語った場に居た私は、今後、その内容を他者に伝えていくこととなる。そうして、加藤さんが先達としてアトとNPOの関わり方を開拓してきた意味が見出され、歴史が刻まれていくのだ。

space×drama2008協働プロデュース公演
突劇金魚「しまうまの毛」



昨年度の優秀劇団である突劇金魚が、應典院寺町倶楽部との協働プロデュースとして、さる7月2日～6日の日程でspace×drama 2008のオープニングを飾った。当劇団を牽引するのは、代表であり作・演出のサリngROCK。ガールズロックと銘打つとおり、その作風は、女子に焦点をあてたものだ。今回の「しまうまの毛」も、女子寮と言う閉塞した空間で生きる女性たちを描き、彼女たちの屈折した価値観を表出させる。だが、サリngROCKはそれを自閉的に終わらせない。「あしたち変態ですけどなにか?」と、人を喰ったような開き直りて、観る側へ逆に問いかけるのだ「あなたは、なにもの?」と。そのあつけからんとした突き抜けた問いかけこそが、女性のみならず、男性からも高い支持を得る要因である。

突劇金魚は、今回、600名弱という過去のspace×dramaの中でも、最高に近い動員を記録した。これは、取りも直さず劇団側の努力の賜物という一面もあるが、space×dramaがこの10年積み上げてきた舞台芸術祭としての価値が評価された結果でもあろう。また、突劇金魚は、この12月に應典院からの推薦劇団として、芸術創造館での公演も決定し、各方面からの期待と注目が集まっている。

枠組みを一新したことで、若手の才能を見出し、育む場としての舞台芸術祭を如何に発展・進化させていくのかが問われる今年のspace×drama、突劇金魚の公演の成果は、その試金石となった。



7月19日、「ARCAudio!」公開録音ライブ「ふぞろいなつわものたち」がアップルストア心斎橋にて開催されました。大阪から気鋭のシンガーソングライター「peck you!!」、京都からダンサー「ニユミコ(from花嵐)」、そして、同じく京都から超脱力系ヒップホップギターデュオ「パーフェクトダンサー」が登場。会場には50人程のお客さん。内容は「これでもか!」という程、どのアーティストも大胆かつ斬新な作風を繰り広げてくれました。近々、ライブ模様が「ARCAudio!」にて公開されますので要チェックです!

関西にはこんなに面白いアートシーンが存在しています

「ふぞろいなつわものたち」in AppleStore Shinsaibashi

詩の学校お盆編 「それから」



8月4日、應典院の本寺である大蓮寺の本堂ならびに墓地にて、詩の学校お盆編「それから」が開催されました。2001年から應典院にて開催されている詩作のワークショップ「詩の学校」も、この時期だけは趣向を変えて、夕暮れの墓地で詩を作ります。そうした場集った皆さんを、秋田光彦住職は、この春に亡くなった榎さんに対して贈った、山尾三省の詩集で迎えました。あいにくの天気でしたが、詩作の時間には、なんとか雨も止みました。「死と詩が同じ発音をもつのは、たんなる偶然ではないと思う」とは、「詩の学校」を主宰し、ファシリテーターを務める上田假奈代さんのことばです。今は傍にいない大切な人を、ことばの力を借りつつ思いを馳せる、そんな玄妙な時間が流れた一夜でした。



艶豆 Report

未分なアートの価値について

生活の中埋め込むアート
去る7月13日、恒例の「寺子屋トーク」第53回を開催いたしました。テーマは「生活の中にアートを取り戻す!」でした。加藤種男さん(アサヒビル芸術文化財団をメインに、大谷煥さん(NPO法人JANEBOX)、岡部太朗さん(財団法人たんぼぼの家)、そしてセックスワーカーとしてまた性感染症に関するライターとして活動するタミヤリョウコさんの3名をゲストに迎えました。

1部は、加藤種男さんの基調講演。美術や演劇、音楽やダンスなど、表現形態からの観点ではなく、昔からの生活の知恵と「アート」の関連についてお話をいただきました。「かつて祭りは生活の一部で、観客はなく全員が参加者だった。」この発言に象徴されるように、アートは観賞されるのみの存在ではなく、生活を営むあらゆる行為の中に埋め込まれた創造的な技術として捉えられべきだと力説されています。

2部では、大谷さん、岡部さん、タミヤさんの順に、ご自身による実践報告があり、会場も巻きこんだディスカッションとなりました。それぞれが紹介した事例は、アートNPOやダンサーたちとともに新世界的地域の盆踊りを復活させた「ビッグ盆!」、子どもたちが撮影し何気ない日常の写真をワー

クショップやインターネットを通じて幅広く共有する「世間遺産」プロジェクト、そして、性感染症予防啓発のためのリーフレットの編集発行についてでした。

加藤さんの講演は、塩の話から始まりました。「工場に製造されたNaClと、われわれが太古の時代より口にしていた塩は別物ではないか。」そこから、純粋な要素だけで構成されたものが「アート」と呼べるのだろうか、という問題提起につながっていました。

なお、今回2部で取り上げた事例は、すべて、実践家と参加者相互の関わりを重視した取り組みでした。「ビッグ盆」は、2006年に、今はなきフエスティバルゲートにて、途絶えていた盆踊りを42年間ぶりに復活させたものです。そこには、アートに対する認識を「観賞」するものから「参加」するものへと変えるきっかけにしたという当事者の思いが重ねられています。また「世界遺産ならぬ世間遺産」は、子どもたちが100年後に遺したい風景を写真で切り取ってくるという取り組みですが、2004年当初から回を重ねる毎に、作品の身身よりも制作の過程を共有することが大事だと考えられるようになってきたとこの

Column
佐伯典彦(介護福祉士・介護支援専門員)

岡山大学卒、放送大学大学院文化科学研究科修士課程政策経営プログラム(福祉政策)修了。應典院寺町倶楽部会員。市社会福祉協議会、専門学校専任教員、障害者施設・老人福祉施設職員、短大非常勤講師(業務)を経て、三重伊賀市 社会福祉法人 青山福祉会 デイサービスセンター「あやま」百々、生活相談員(介護福祉士・介護支援専門員)。最近の主な研究は、「御詠歌・読経を用いた認知症高齢者への介護実践(日本福祉文化学会「福祉文化研究」vol.17 2008年)」「老人デイサービス利用者への仏教介護的相談・助言に関する試論(『日本仏教社会福祉学会年報』第39号 2008年)。

「葬式仏教の打破」「開かれたお寺の創造」に向けて、様々な展開をするお寺は應典院だけではない、この夏、休みをとって岡山のあるお寺で「復活する夏祭り」に参加した。

薬園山長泉寺は、岡山市の中心から2km、南方(みなみがた)という地域にある。開山は永世6年(1509年)6月で、平成21年に開山500年を迎える。このお寺は、京都の仁和寺の系列に連なる。薬師如来を奉り、今日まで篤い信仰を支えられてきた。

かつて長泉寺では年2回、お祭りが行われていた。しかし、現在は1つもなく寂しい限りとなっていた。「みんなが集まるお寺にしたい!」現住職の宮本光研氏は開山500年を機に、地域の人々が集う寺へと復興させたいと考えた。そこで、地域で音楽を通じた福祉・教育・文化活動をされている、NPO法人「音楽の音」理事長、松原徹氏に「マンダラ音頭 - みんなみかた」と「奉讃 三寶贊歌」のCDと記念Tシャツ作成を依頼された。宮本光研氏は、仏教詩人としても世界的に活躍されている。よって、作詞はご自身が手がけられた。そして本年7月17日、寺で納涼祭を復活させた。この曲を使って、地元の小学生から20歳代の男女が「HIPHOP調の」創作盆踊りを2作(若者向と年配向け)?を披露(いずれも少しテンポが速い?)。ヤングオーラド合唱団が登場したり、地域に住む南米の方

が、故郷の料理の模擬店を出店したり、地域の老若男女が寺に集った。祭りは大成功であった。地域の人々が寺に期待し、寺がその期待に応える気持ちのよい関係の成立。それは開かれたお寺の復活を意味する。さしずめ、呼吸する寺岡山版でもと言える。

ちなみに三重在住の私だが、毎年12月26日に應典院で開催されている「自分感謝祭」に参加している。1年を振り返り、次の1年を展望するよい機会だ。この場にも「祭」という文字が入っているのが興味深い。

以上、地域の人々が集う開かれた寺院の創造に向けての取り組みを取り上げた。長泉寺の、まだ「元祖」呼吸するお寺の應典院の今後に期待している。

カ...

Interview

山口洋典さん(浄土宗・應典院主幹)

再建10周年を控えて着任した二代目主幹。お寺で事業をプロデュースするにあたり、自らを「僧侶B」と位置づけ、社会の問題解決に取り組む。



撮影 今田修二

「秋田住職が市民會と言っている概念を、私はあえて僧侶Bと言ひ換えました。半人前のB級僧侶という意味ではなく、葬儀などを行う人たちはと違ふ。お盆編だということを訴えるためです。」

應典院主幹 山口洋典は、僧侶であることの自覚を語る。

應典院寺町倶楽部の事務局長を務めている山口は、浄土宗寺院・應典院の主幹でもある。主幹という肩書きは自治体では馴染みがあるが、お寺では希だ。いみじくも、東京・愛宕にある青松寺にて、以前南直哉師が同じく主幹という肩書きを付していた。外に出て行く住職でもなく、内を固める執事でもない。カタカナ用語を用いてもよいなら、主幹とはさしずめ事業のプロデューサーと言える。

「僧侶として働くことに特に抵抗はありませんでした。ただ、秋田住職×應典院という条件でなかったら、僧侶にはなっていないですね。それは仏道に専心するために僧侶



▲浄土宗の宗徒になるにあたり、秋田光彦住職に対し、仏、法、僧の「三宝」を敬うことを誓う。=法然院(京都市左京区)の本堂にて(06年5月2日)

になったわけではないからです。自分の理解者のもとで働きたいという思いを叶えるためには得度する必要があった。それだけです。」

應典院で働かないかと誘いを掛けたのは秋田光彦大蓮寺住職。應典院主幹(当時)であった。もっと悩むはずと、思っていた秋田は、二つ返事で了承した山口に驚いたという。05年の夏のことである。サラリーマンの家庭に育った山口は、大学関係に職を得て、社会人大学院生として應典院のある上町台地区のフィールドワークを通じて秋田との信頼関係を深めた。そして、06年度に應典院に着任し、時を同じくして「僧侶B」という言葉は、環境問題の解決に必要な発想としてレスタイプラウンという人が訴えた「プランB」が元ネタです。社会問題の解決に必要な発想は僧侶Bという具合で……」

山口の特徴は、秋田以上に言葉にこだわることだ。既に言葉に展開されている催しのいくつかで、山口がパソコンを駆使しつつ、瞬発力で文章を捻り出す風景を見た方も多いだろう。実は山口は應典院に着任した同年5月の任期中同志社大学の教員を兼職することになった。実践の意味を言語化したいという欲求は、学究心からも目を見えない。

「應典院はお寺としては風変わりな建築をしています。しかし、これだけのお寺です。宗教空間にどのような時間を演出するのがよいのか常に事業プロデューサーには倫理観が問われていると思つて、適度な緊張感を持ち続けていきたいですね。」

秋田住職と同じく、山口もまた、應典院が持つ場所の力に魅力を感じている。震災ボランティアという共通経験を持つ二人のリリースが、應典院という希有な力を放つ場を介してどのような輝きを放つていくことになるのか。目が離せない。